今日は、五月五日火曜日世間では、こどもの日と言われているだけあって街中は、忌々しい家族連れでいっぱいだ。
「今日もキモチイイ朝だなぁぁぁぁ！ゴールデンウイーク休んでいる奴は、人生損してるぜぃぃぃぃぃ！」

京極双二十八歳独身数多のブラック企業を渡り歩いてきた正真正銘の企業戦士だ。
そんな全国津々浦々のブラック企業が喉から手が出るほど欲しい人材だが、数々の問題行動があるのもあり、会社をクビになってしまうのだった。

「これで、四社目か、うむ！退職代行を殴ったくらいでクビにしてくるとかこんな会社未来がないな！」
双は大きく伸びをすると、道行く家族連れにこれでもかとギラついた視線を浴びせた。
「まったく、少子高齢化のこの時代に子供を連れてのんきにお出かけか？労働こそが最大の社会貢献だってことを、義務教育で教わらなかったのかねぇぇ！」
すれ違う人々が、明らかに変質者を見る目で双を避けていく。しかし、本人はそれを「己の放つ圧倒的なプロフェッショナル・オーラに恐れをなしている」と脳内で都合よく変換していた。

手始めに双は、駅前のラックから無造作に求人フリーペーパーを引っこ抜き、近くの公園のベンチに腰掛けた。
ページをめくる指の速度は、もはや熟練のギャンブラーのそれであった。
「ほう……『アットホームな職場です』？生温い！職場に求めるのは家族愛ではなく、血のションベンが出るほどの達成感だろ？」
「『完全週休二日制』？怠惰！週に二日も脳を休ませて、どうやって世界相手に戦っていくつもりだっ！」
彼が探しているのは、世間一般の人間が全力で逃げ出すような「本物の戦場」だった。
そんな双の目が、ある一行のキャッチコピーに留まる。
【急募】二十四時間戦える精鋭求む。**実力主義**、限界のその先へ。※メンタルに自信のない方はご遠慮ください。
「……これだ」
双の口元が、肉食獣のように吊り上がった。

翌日。双は、とある雑居ビルの5階にある『漆黒ロジスティクス』の面接室にいた。
対面に座る面接官は、見るからに寝不足で目の下にどす黒いクマをこしらえている。
「えー、京極さん。これから面接を始めていきたいと思います。まず、最近調子どうですか？」

「えー、京極さん。まずは緊張をほぐす意味でも……最近の調子はいかがですか？」
「最高！の一言に尽きますねっ！」
双は背筋をピンと伸ばし、歯切れよく答えた。
「昨日、四社目のクビが確定しましてね。退職代行の生ぬるいツラを拝んだ瞬間、あまりの不条理さに脳内麻薬がドバドバと分泌されました！　失業という名の人生最大の挫折！　これこそが私を最も滾らせるスパイスです。現在、私のモチベーションは過去最高潮、いつでも二十四時間戦えるフルスロットル状態です！」
「なるほど……（素晴らしい！京極双君の狂気をもっと見せてくれ……）」
面接官は満面の笑みを浮かべながら、手元の資料に何かを書き留めた。

「では、次に具体的な状況設定の質問です。もし、記録的な大雪で交通機関が完全にストップし、どうしても取引先へ向かう手段がない場合、君ならどう対応しますか？」
「手段がない？　愚問ですね既に取引先の扉の前にいますよ?交通機関がなければ行軍すればいいんですよ！月月火水木金金んんんん！」
双は身を乗り出し、ギラついた目で面接官を睨み据えた。
「雪が降ろうが、槍が降ろうが、這ってでも約束の時間までに這いつくばって行く。それが人としての常識！日本国憲法にも明記されなければならない！　もし物理的に道路が封鎖されているなら、取引先のビルに向かって雪中行軍を敢行し、最悪、ビルの壁面をピッケルで登ってでも社長室の窓を叩きます！『行けない』という選択肢は、私の辞書には存在しないぃぃぃ！」
「……（んんー、マーベラス！もう、採用だよ！初めて見たよこんな逸材…）」
面接官の瞳孔が開いた。その顔には、ある種の期待が浮かび始めていた。

「……なるほど。では最後の質問です。昨今、社会的に厳しく叫ばれている『パワハラ』について、君はどのような見解を持っていますか？」
その問いを聞いた瞬間、双の口元が肉食獣のように歪んだ。
「パワハラ？　素晴らしい文化じゃないですか！」
「は？」
「上司からの熱い鉄拳、怒号、罵詈雑言！　それらはすべて、期待の裏返しであり、自己を極限まで高めてくれる『愛の鞭』です！　むしろ、今の若い奴らは叱られたくらいでピーピー泣き言を言いすぎなんですよ。私などは、上司に灰皿を投げつけられたら、それを顔面で受け止めて、笑顔で『もっと強くお願いします！』といいますね。あ、ちなみに前職では、私を叱責してきた上司の熱意に感動し、お礼のつもりでハグをしたら肋骨を折ってしまいまして……あれは不可抗力です！」
「……もう、会社の領域を超えて、君と結婚したいよ」
面接室に、しんと静まり返るような沈黙が流れた。

普通の人事なら即座に警察を呼ぶか、不採用のハンコを押すレベルの狂気。しかし、慢性的な人手不足と激務で脳がバグっていた面接官の目が、一瞬、怪しく光った。

「……面白い。君、今日からクレーム処理班、いける？」

「御意ッ！！」

こうして、京極双の五社目となる、新たなる社畜伝説の幕が開けるのだった。